

---

# 俺の平凡で平凡じゃない日常

芹沢凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の平凡で平凡じゃない日常

### 【Nコード】

N6638I

### 【作者名】

芹沢凜

### 【あらすじ】

俺、井上<sup>いのうえ</sup>一希<sup>かずき</sup>の平凡で平凡じゃない日常を描いた笑いあり感動あり多少のシリアス&涙ありのドタバタラブコメディーが今始まる！  
？

ヤベツ！完全に遅刻じゃん！（前書き）

生まれて初めて小説を書くので、ストーリー構成がグダグダだったり、誤字脱字があったりするかも知れませんがどうぞよろしくお願  
いします。

ヤベツ！完全に遅刻じゃん！

「兄貴、起きろお」

うっ…うーん…誰だ俺の睡眠を邪魔するのは？もう少し寝させてくれ…

「そろそろ起きないと遅刻するよ？」

「それを早く言え〜！」

「うわっ！いきなりデカイ声出すなよ！」

何か妹が騒いでいるがそんなことはどうでもいい。今何時だ？

AM 8 : 34

もう完全に遅刻じゃねえか！

「じゃあアタシも時間ギリギリだから行くね！」

妹の井上楓<sup>いのうえかえで</sup>が走って家を出て行った。

しかたがない…俺も行くか…

俺はとりあえずウ○ダーインゼリーを飲みながら家を出た。

自己紹介が遅れたが俺の名前は井上一希<sup>いのうえかずき</sup>。超が付くほど平凡な明坂<sup>あかさか</sup>学園に今年から通っている平凡な高校一年生だ。

おっと…自己紹介をしていたら学園に着いたぜ。

俺のクラスは1 Bで学園…なんでもない。

とりあえず先生にバレないように自分の席に着こうじゃないk「先

生々カズが来ました」

馬鹿野郎っ！何普通にチクってんだよっ！

「井上、遅刻してんじゃねえよ！しかもこそこそ席に着こうとしゃがんで！」

「すみませんでしたっ！！！」

担任の唐沢百合先生かたさわひゃくが鬼の形相で迫って来たので瞬時に謝った。

「はあ…まあいい。今回だけは許してやるよ。」「マジすみませんでした。」

何とか難は逃れたぜ…危ない危ない。

俺は廊下側の前から二番目の自分の席に着いて教科書を机の中に押し込んだ。

「災難だったなカズ。」

「おかげさまでなっ！」

「イテツ！」

コイツは新川あらかわりょう了。中学の時からあらかわの悪友だ。さっきチクったのも了だ。俺は了にきちんと反省して貰うために優しく優しく頭を叩いてやった。

ちなみに了の席は俺の一個前の席、一番前だ。まだ入学してから席替えをしてないから出席番号順のままだ。

それにしてもこのクラスは賑やかだな。誰ひとりとして百合先生の話あらかわを聞いてない。そろそろ百合先生キレんじゃね？

「てめえら…ほんの数分のHRですら静かに聞けねえのかっ！！！」…

スゲー！みんな姿勢正して話すの止めたよ。さすが元ヤン！迫力あるわあ！

ドカッ！

「グハッ！」

イッテエー！何だよいきなり！てか誰だよ俺の額に何かなげたの！

バラバラ…

ん？なんだこの白い粉は…ってまさか！！

「いい度胸だな井上…遅刻した上に人の話を聞かないとは…」

「いやっ！ちゃんと聞いてました！」

「ほお！なら内容を言ってみる。」

「…聞いてませんでした。」

「馬鹿野郎っ！！！」

「ちよ！あぶっ！グハッ！」

…チョーク投げってこんなに殺傷力あったっけ？  
そんな事を考えながら俺の意識は遠退いで行った。

ヤベツ！完全に遅刻じゃん！（後書き）

やっぱり小説書くのって難しいですね。

誤字脱字などがあつたら遠慮無く教えてください。

ついでに小説を書く時のポイントとか教えてもらえると有り難いです。

彼女の名前は…（前書き）

遅くなつてすみません。

次からはもうちょっと早くしたいと思います。



彼女の名前は…

気が付くと俺は知らない部屋にいた。どうやらベッドに寝かされていたらしい。

今何時だ？俺は周りを見回してみたが周りにはカーテンが掛かっていて何もわからない。

俺はとりあえずベッドから出ようと思い、布団をどかしてみたらそこにはシヨートヘアアの柄な女の子がいた。

って…ぎゃあああ！！ちょっと待て！！何故彼女がここにいる？何か何故俺と同じベッドで寝ている？

俺はどうすれば良い？やっぱこの場から立ち去るか？それともこのまま彼女の横で彼女が起きるまで狸寝入りでもするか？どうする俺！！

「うっ…うっん…」

ヤベツ！！起きる！！

「井上君オハヨー。」

「あ…ああ。おはよう…」

何故だっ！？何故彼女はこんなにもリアクションが薄い？

「井上君が先生のチョコク喰らって倒れちゃったから心配したんだよ。」

「あ…ありがとう…もう大丈夫だ。ところで今何時かわかるか？」

「本当に大丈夫？えっと…今は12時34分！お昼休みだよ！」

「そうか。ありがとう。」

「いえいえ。それじゃ私は先に教室に戻ってるね。」  
「りょーかい。」

ふーっ…どうやら3時間以上寝ていたらしい。まあ午前の授業サボれたから良いか。

え？さっきの娘は誰かだつて？彼女は芹沢葵<sup>せりざわあおい</sup>。背は小さいが運動神経が普通の男子よりもよく、いつも笑顔でみんなに幸せを振り撒いている。勉強は…可哀相な成績だ。

ちなみに言っておくが俺は芹沢のことが好きだ！大好きだ！モロ好みだ！

…スマン。ちょっと興奮し過ぎた。これからは気をつける。

それじゃ教室に戻るか。そろそろ俺も教室に戻って飯喰わないと腹がもたないからな。

教室に着くと了が男子2人と先に飯を食っていた。

「遅いよカズ〜！」

「それよりカズ君。おでこ大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ。」

「そんなことより一希が来たんだから早く喰おう。時間が無い。」

「待っててくれたのか。ありがとな。」

俺のことをカズ君と呼んだのは高嶺春樹<sup>たかみねはるき</sup>。背も小さいし声も高い。

髪はサラサラで肌は陶器のように白い。中性的な体つきで、そこから女子より女子に見える。しかもハルの親父さんはセレブが泊まるような高級ホテルである『高嶺ホテル』の社長さんだ。ハルの家…と言うか屋敷にはたくさん執事さんやメイドさんがいるらしい。

そして俺のことを一希と呼び捨てにしたのが中野浩史<sup>なかのひろし</sup>。長身でインテリ系の眼鏡を掛け、学力は学年で1番と言う絵に描いたような天

才だ。しかし残念なことにヒロはラノベやフィギュア、ギャルゲが大好きなオタクだ。俺も初めてそれを知った時はマジでビビったよ。

「まあ友達の紹介はこれくらいにして俺も飯喰うか…」

「お前は誰と話してるんだ？」

「気にするなよ。このベーコン巻きいただき！」「あ！返せよカズ！」

「2人とも落ち着こようよ！」

「ベーコン巻きつまっ！！！」

「あゝ俺のベーコン巻きが…」

「お前ら黙って喰えやっ！！！」

ヒロがキレた…まあいいや。ベーコン巻き旨かったし。

でも結局芹沢は何しに来たんだろ？

彼女の名前は…（後書き）

作者「今回から僕とカズで後書きを頑張って行こうと思います。」

一希「何を頑張るのかは知らないけど…みんなヨロシク！」

作者「ところでなんで芹沢が好きなの？」

一希「…」

作者「おーい」

一希「…」

作者「それではまた会いましょう。さよ～なら～」

ス〇バのコーヒーって美味しいよね！（前書き）

定期試験近いのでソツコーで書きました！

ス〇バのコーヒーって美味しいよね！

昼休みが終わり、俺は午後の授業を寝て過ごした…じゃなかった。睡眠学習をして過ごした。

そして放課後…

「カズ〜この後ストバ行かね？」

「奢ってくれるならな。」

「えー」

察しの良いみんなはもう気付いているだろうが、ストバとは某喫茶店の名前とマークをほぼパクった喫茶店、『ストーバックス』のこただ。ちなみに店長の苗字は守塔<sup>すとう</sup>。スターとストウを掛けたのかな？

「僕も行きたいな。」

「それなら俺も。」

「じゃあ俺も行く。」

「よし！じゃあみんなで行こう！」

てなわけで俺と了に加えてハルとヒロも行く事になった。

「キャラメル マキアートとブラック モカ チップ フラペチーノとジンジャーブレッド ラテとホワイト チョコレート モカ フラペチーノを一つずつ。」

「畏まりました。」

今、了が俺らの分をまとめて買っている。俺の分は了の奢りだが…確か今日はハルもヒロも金持って来てないって言ってた気がするん

だが…まあ良いか。

「買って来たよー」

「遅えよバカ！」

「なんだよ！遅いのとバカは関係ないだろ！」

「うるせえ！テメエらは静かに会話することも出来ねえのか！！」

「…お前が一番うるせえよ。」

俺と了がちよつとした口喧嘩をしていたら、いきなりヒロがめつちやデカイ声で注意してきた。まあ確かに今のは俺らが悪かったけど、ヒロの方が100倍うるせえし周りに迷惑だ。

「カズ君！リヨウ君！ヒロ君の言う通りうるさいよ！ヒロ君は声が大き過ぎて周りの人に迷惑だよ！」

「…スマン…」

「わかったのならみんな仲良く飲み比べてみようよ！」

どうやらハルは俺らのやつも飲みたいらしい。まあ別に女子がいるわけじゃないし回し飲みしても問題ない。

「ところで一希、午前の授業の途中で芹沢が保健室に行くと言って教室を出て行って、昼休みに嬉しそうにスキップしながら戻ってきたんだが…何か知らないか？」

「ブーッ…ゲホゲホッ…何故そんな事を俺に聞く？」

「何故ってお前が保健室に居たからに決まってるだろ。」

「いやっ！断じて何もなかった！俺は何もしなかった！」

「逆に怪しいよカズ君…」

「何！？何かやったの！？」

「俺は何もしてない！勝手に芹沢が…」

「芹沢が？」

「…何でもない。」

危ねえ〜っ！危つく言っちまうとこだった。

「まあ…一希が言いたくないなら言わなくていい。」

ヒロが物分かりの良い奴で助かった。

「全校生徒から情報を集めるだけだからな。そしてその情報を新聞部に売る。」

「ごめんなさい。ちゃんと言いますからそれだけは勘弁して下さい。」

前言撤回！やっぱヒロは悪魔だっ！今度からデビルヒロと呼んでやる！心の中で…

そして俺は仕方なく昼休みにあつた事を洗いざらい話した。

「でも芹沢がスキップしてた理由は俺だつてわからないよ。」

「…は？」

「は？とはなんだ！お前らには芹沢の気持ちがわかるとでも言うか！」

「もしかしてカズ君…気付いてないの？」

「何を？」

「いや。だから芹沢さんがカズ君の事すry」さて。全部飲んだことだしそろそろ帰るか。」

「おい！ヒロのせいでハルがなんて言ったかわかんなかったじゃねえか！」

「別にたいしたことじゃないだろ。それにお前は早く帰って夕飯作らなくちゃいけないんだろ？」



「やっべ！ゴメン！俺先に帰るわ！じゃあまた明日！」

「おう！また明日。」

「バイバイ！カズ君！」

「じゃあな。」

ヤバイ！早く帰って飯作ないと楓に殺される！！

その頃ヒ口達は…

「何で途中で止めたの？」

「いいか春樹。こういう恋愛関係の事は他人を通じてより直接本人に言った方が気持ちがちんと相手に伝わるんだ。」

「なるほど！これからは気をつけるよ！」

「俺も気をつけるよ。」

「ああ。そうしろ。」

それに言わない方が面白い事になるし、観察のし甲斐があるからな。  
楽しませてくれよ！井上一希！

ス〇バのコーヒーって美味しいよね！（後書き）

作者「ヒロって何者なんだろ？」

一希「それはこっちの台詞だ。」

作者「だって僕、その場で考えてその場で書いてるから……」

一希「それで良いのか？」

やっぱり家族は大切だよな！（前書き）

定期試験があつたんで遅れちゃいました。

やっぱり家族は大切だよな！

「ただいま」

「遅い！」

やっぱりもう楓が帰って来ていた。

「ゴメン。今すぐ飯作るから。」

「本当に早く作ってよね！」

こりゃとつとと作ないと後が怖いな…

え？何で俺が飯を作っているのか？あれ？言っでなかったっけ？俺の両親は二人とも外国で働いてるんだよ。ちなみに母さんが社長で親父が秘書だ。詳しいことはわからないが、母さんは有名なデザイナーなのだそうだ。

家事は二人で分担してやっている。俺が料理と掃除、楓が洗濯だ。やっぱり年頃の女の子は男に洗濯物を畳ませたりするのが嫌なのかな？

よし！チャーハンと野菜炒め完成！俺は料理の腕には自信があるんだ！

「飯出来たぞー」

「今行く」

たつく…人が折角出来立ての飯を食わせてやるつもりで呼んでやっつてんの…

「早くしねえと冷めちゃうぞ?」

「ちよつと待って!今良いとこなの!先に食べてて!」

「じゃあ先食ってるけど、早く来いよ。」

「はいはい。」

アイツ何様のつもりだ?自分では料理出来ないくせに!まあ…楓が料理をすると材料全てが灰になるから俺が料理をさせないだけなんだけどな…

おにぎりですら…と言うより米すら炊けないレベルだ。てか炊飯器を爆発物に変えるってのは人間としてどうなんだ?もしや新手の超能力者か?

俺がTVを見ながらチャーハンを食っていたら、楓がフラフラしながら汗ダクで部屋に入って来た。下着姿で…

「…とりあえずタオルで体を拭け。」

仕方なくタオルをとって楓に渡した。

「…」

動く気配が無い…

「早く拭かないと風邪ひくぞ。」

「…」

返事が無い、只の屍のようだ。

「おい！楓ちゃん！何か返事してくれ！」

「…から…あに…が…て…」

「何だ？聞こえなかったからもうちょっとデカイ声で言ってくれ。」

「体が…動かないから…兄貴が拭いて…」

「…」

どうする俺！やっぱ拭くべき！？いや！いくら相手が妹でもダメだ  
ろ！…てか何この展開！！

「寒い…」

ヤバイ！何かもう風邪ひきそうなんだけど！！くそ…覚悟を決める  
しかないか…

「か…楓…今から拭くからちょっと我慢してくれ。べ…別に変な気  
があるわけじゃないからな！」

「ん…」

よし…落ち着け俺…クールになるんだ…相手は妹だ…兄妹なんだ  
…いくら楓が年頃の女の子でも妹なのはかわらない…  
よし…落ち着いてきたぜ…

とりあえず顔から順に下に向かって拭いてこつ…

ふうーっ！やっと拭き終わったぜ！

「とりあえず拭いたから服着て来い。十分休んだろ。」  
「ん。わかった。」

これでやつとゆっくり飯が食える…って完全に冷めちまつてるじゃねえか！！仕方ない…レンジで温めるか…

「あれ？ご飯は？」

「冷めちまつたから今温めてる。」

「そっか…ゴメン。」

「いいよ別に。飯より楓の体の方が大切だからな。…別に変な意味じゃないぞ。」

「わかつてる。ありがとう兄貴。」

何か久しぶりに楓に「ありがとう。」って言われた気がする。

「ところでなんであんなバテてたんだ？」

「筋トレしてたんだよ。最近体が鈍っちゃってさ…思うように体が動かなくなつて…それで顧問の先生に家でのメニュー作ってもらつてそれやってたんだけど…ちょっと貧弱で頭がぼーっとしちゃったんだよ。」

「頑張るのは良いことだけど無理するのは悪いことだぞ。自分である程度目安を決めて休憩しないとダメだろ。これからは、ちゃんと自分のことを考えてから筋トレなり練習なりしろよ。」

「わかった。」

「そんじゃあ温まつたみたいだから飯食おうぜ。」

「うん！」

その後は俺も楓も何事も無かつたようにいつも通り過ごした。

でも寝る前に楓と家族の約束事を決めた。それは『何事も無茶をしないこと。』だ。ついでに『何かあったらどうでもいいよつなことも言う。』ということも約束した。

まあ…とりあえず俺は、これからも兄妹仲良くやって行こうと心に決めた。



やっぱり家族は大切だよな！（後書き）

作者「楓ちゃんって可愛いよね。」

一希「そりゃ俺の妹だからな！」

作者「…それって遠回しに自分がカツコイイって言いたいの？」

一希「違っ！！」

作者「うーん…やっぱりカズは面白いね。」

一希「うるせー！！」

幼なじみはツンデレ？いいえクーデレです。（前書き）

ちょっと遅いけどあけましておめでとございます！

そして遅れてすみません！

なかなかストーリーとキャラの性格が定まらなくて苦戦中です。

今年も投稿は不定期になると思いますが頑張つて書いて行きたいと思えます！

幼なじみはツンデレ？いいえクーデレです。

「ちよつと時期が半端だが…今日から我がクラスに新しい仲間が加わる事になった。」

「男子かな？女子かな？アタシはイケメンの男子の方が良いな！」  
「だよねえ〜」

「いやいや女子だろ！むしろ女子だろ！てか絶対女子だろ！」  
「俺も女子の方が良い。」

「男子！」  
「女子！」

「男子っ！」  
「女子っ！」

「喜べ男子。残念だったな女子。転入生は女子だ。しかもかなり美人だ。まあ…私程ではないけどな。」

「…よっしゃあああああああああ！」「」  
「…え〜っ」「」

「だが親しみやすい奴だから女子もそう落ち込むな。そんじゃ入ってくれ。」

ガラガラガラ〜ピタッ

「はじめまして。東雲秋穂しのめあきほです。血液型はA型で、誕生日は8月16日。アキって呼んでもらえると嬉しいです。中途半端ですがこれ

からクラスメイトとしてヨロシクお願いします。」

「……うおーっ！」「」

「……キヤーツ！」「」

ん…ふあ…っ…何かやけに騒がしいな…

「了、何事だ？」

「何事だ？じゃないよカズ！何呑気に寝てんだよ！転入生だよ転入生！しかも女子で大和撫子って言葉が似合うほど美人だよ！」

「何！？それなら早く起こせバカもの！」

教卓の方を見ると了が言った通りの美人がいた。黒いストレートの髪を腰の辺りまで伸ばし、肌の色は白く、顔は凜としていて、着物が似合いそうだ。しかも…胸が大きい！！只大きいだけじゃなくて品のある大きさだ。

「じゃあどうせ1時間目はLHRだからその時に質問とかはしてくれ。じゃあ東雲の席は…」

はっ！俺の隣の席が空いている！まさかこれは…

「窓側の一番後ろの席が空いてるからそこに座ってくれ。」

ですよね〜

そんな都合の良いことはテレビとか漫画とかでしか起きないですよ  
ね〜

クソツ…わかってたよ！わかってたけど一瞬でも期待した俺がバカ  
だった…

すまない北村…一瞬お前が消え無くなれば良いと本気で思ってしま

った…

「わかりました。」

ちっ…どうせ俺はフラグの立て方もわからないダメな奴ですよ…つてあれ？何かめっちゃこっち見てない？あれ？俺何かやつちやつたかな？

「一希？」

「…はい？」

「井上一希だよな？」

「うん。そうだけど？」

「会いたかったよ一希！」

いきなり抱き着いて来た！？

え？え？なんですかこの状況は？

男子！そんな殺気立ててカッター持つな！

女子！そんな期待した目で見るな！

先生！他人事だからって笑ってないでこの状況を何とかしてくれ！

「と、とりあえず離れてくれないかな？」

「あ！うん。ゴメン。」

「えっと…俺、東雲さんとどっかで会ったことあるっけ？」

「…小学校」

ヤベッ！ちよつと涙目になって来てる！えっと…小学校…東雲秋穂…東雲…しののめ…しのの…しの…シノ…！

「…シノ？」

「うん！」

「そつか！シノか！いやあ…余りにも変わっててわかんなかったぜ。」  
「うん！一希のために頑張った。」

本当に小学生の時とは全然違う。あの頃は髪はショートだったし基本的に男子に混じってサッカーやら野球やらをやって泥だらけになっていた。その辺の男子より男子らしくて女子にも人気があったし、可愛いかったから普通に男子にもモテた。  
でも5年生の終わり頃に親の仕事の都合で引越したんだ。

「って今何て言った？」

「一希のために頑張った。」

「何故!？」

「昔から一希のことが好きで、一希の好みの女になれるようにと…」

ヒュン!

サツ(一歩横に動く)

シユカカカ!

「「「チツ!!」「」」

って危ねえ!!

奴ら(男子)シノに当たらないように俺の顔を的確に狙ってカッタ  
ーを投げやがった!!しかもコンマ1秒で!!

「よしわかった。お前もいろいろ言いたいことあるだろうし、俺も聞きたいことがいっぱいあるけど、今は俺の命がとても危険だから話すのは後にしよう。とりあえず席に着け。」

「うん。」

「待て。何故お前は北村の席に座っている。」

「一希の隣が良い。」

「いや、だからそこは北村の席であつてだな……」

「後ろの席だと隣の人がいなくて教科書を見せてもらえない。」

「いや、でも……」

「良いですよね先生。」

「うーん……まあ面白そうだから許す。」

「なんでだあああ!!」

「こうして一希の命懸けの一日が始まった。」

「変なナレーション付けんなっ!!」

幼なじみはツンデレ？いいえクーデレです。（後書き）

作者「って訳で死なないように頼むよ。」

一希「俺の生死を決めるのはお前だろ！てかメインヒロインの事は  
つといて何新しいヒロイン候補登場させてんだよ！」

作者「だって…芹沢のイメージが定まらないんだもん！」

一希「きめえよ！てか頑張れよ！」

作者「じゃあ次くらいに出そうじゃないか。どうなるかわかんない  
けど。」

一希「頼むよ作者…」



屋上ってこの時期結構寒いよね！（前書き）

新キャラ登場！

そしてお待ちかねのヒロインもやっとちゃんとお出るよ！

北村は…気にするな。

屋上つてこの時期結構寒いよね！

やあ皆さんこんにちは。井上一希です。

突然ですが転入生が来ました。シノこと東雲秋穂です。

彼女の事で困った事があります。

彼女は小学5年生の終わりまで俺の家の近所に住んでいて、良く遊んでいました。

世間で言う幼なじみってやつです。

親の転勤で小学5年生の終わりに引越してしまつてそのまま約4年、初めのうちは寂しかったです。そりゃ毎晩布団を涙で濡らしましたよ。でも時間が経つにつれて忘れていきました。

そして今日、感動の再会を迎えたわけなんですよ。

どうやら最近こっちに帰つて来たらしいです。

まあぶつちやけそんな事はどうでもいいんです。問題なのは…

「シノ…いい加減俺の後に付いて来るのやめてくれないか？」

「別に一希に付いて行つてるわけじゃないよ。」

「じゃあなんで男子トイレまで付いて来るんだ！」

「えっと…中はどんな感じなのかなって思つて…」

「嘘だろ。」

「うん。嘘。」

俺の後を付いて来る事という事だ！

何処に行くにしても付いて来る！

これじゃあトイレに行くどころか他の奴らともまともに会話ができないじゃないか！

「飯食おうぜ一希。」

「ちよっと待ってくれ。すぐこいつを離さ。東雲さんも一緒に食べない？」って何言ってるんだよヒロ！」

「良いの？」

「ちよっと人ののはん。東雲さんが良ければ。」を聞け！って俺のセリフにモロ被ってるんだけど！」

「ありがとう！一緒にさせてもらっね。」

「いや俺ら男子ばかりだから華が無くてね。こちらこそありがとう。」

「完全に俺の話聞く気無いだろ！少しぐらい聞けよ！」

どうやら俺の存在は校長の髪より薄いらしい…泣いていいかな？

「いつ井上君！」

「ん？ああ芹沢か。どうした？」

「私達もお昼と一緒にしても良いかな？」

「おう。俺的には全然問題無いよ。お前らも問題無いよな。」

「俺は別に良いぞ。」

「僕も良いと思う。女の子達と仲良くなれるしね。」

「俺は女の子達と一緒にいれるだけで幸せだ。」

「てな訳で一緒に食べようぜ。」

「ありがとう！」

ヨッシャアアアア！！芹沢と一緒にご飯！他の奴らもいるけどそんなのどうでもいい！

「私は別に…」

「そんな言わずにさ。皆も良いって言ってくれたんだし。今更拒否権は無いよキョウちゃん。」

「…仕方ないわね。わかったわよ。」

「さすがキョウちゃん！物分かりが良いねっ！」

おっと、紹介を忘れていた。芹沢と一緒にいる眼鏡をかけた知的な女の子は小鳥遊杏たかなじきょう。小鳥が遊ぶと書いて「たかなし」と読むとても珍しい苗字だ。確か芹沢とは中学の時から友達のはず…え？なんでそんなことを知ってるかって？そりゃ好きな子の周りの事は少なからず知りたいしさ。それに実は俺の相談にのってもらったりしてるんだ。基本的に約束は守ってくれるし、面倒見も良いから結構信頼できるんだ。

「んじゃどうする？この人数だと教室は狭いし、食堂は席が無い。」  
「屋上ってのは？」

ナイスアイデアだリョウ…って屋上は鍵掛かってんじゃん。

「確か屋上は鍵が掛かってるはずだけど。」

「じゃあ僕が鍵を借りて来るから皆は先に屋上の前まで行って。」

「え？屋上の鍵って借りれるの？」

「普通は無理だよ。でもまあ何とかなるからさ。僕を信じて待ってよ。」

「……………わかった（わ）。」「……………」

「皆で八モんないですよ…怖いなあ。」

言われた通り屋上の前で待っていると10分ほどでハルが鍵を持っ

て来た。

「どうやって借りたんだ？」

「確かに。」

「気になる。」

上から順にリヨウ、ヒロ、シノがハルに聞いた。

「いやあ…校長先生にカツラの事と、どうすれば髪が生えるかを教えてあげただけだよ。」

「……………」

「ついでに父さんの会社が販売してる育毛剤とブラシをプレゼントしてあげたら、スペアキーをくれたよ。」

「高嶺君…さすがに校長先生を買収するのはどうかと思うわよ。」

「今度からは気を付けるよ。」

さすがハル…親父さんの手伝ってるだけはあるな。交渉(?)するのが上手い。

「おーっ！」

「良い眺め。」

「屋上にして正解だったねっ！」

「そうだな。」

それにしても人がいねえな…って当たり前か。逆にいる方が怖い。

「じゃあシート敷いたから食べよっか。」  
「そうしましょう。」  
「腹減ったあゝ」  
「そんなじゃまあアレだアレ。せーの。」  
「……………いただきます!」「……………」

うん。やっぱり飯は大勢で食べる方が良いな。女の子達が一緒ってのがなお良い。いつもより断然華やかだ。

「カズその肉ちようだい!」  
「じゃあ代わりにお前の弁当全部寄越せ。」  
「いや、さすがにそれはないでしょ。」  
「冗談だ。後でジュース奢ってくれんだったら良いぞ。」  
「わかった。じゃあ貰うぜ。」  
「おう。」  
「うめえーっ!」  
「うるせえな叫ぶなよ。」  
「さすがカズだな。この肉良い感じに火が通ってるし味付けもちよ  
うど良い。」  
「本当?じゃあ僕も。」  
「じゃあ俺も。」  
「待てお前ら。俺の食べる分が無くなるだろ。それ以上取るな。」  
「そのお弁当井上が作ったの?」  
「そうだが…どうした?」  
「いや…私も貰って良いかな?」  
「別に良いけど。」

「わつ私も貰って良いかな？私の野菜炒めあげるから。」  
「私も食べたい。」  
「おう。遠慮しないでくれ。」  
「それじゃあ…」  
「…」いただきます。」「」

もぐもぐ…ごくん

「…」美味しい！」「」  
「喜んでもらえて良かった。」  
「井上君がこんなに料理が上手いなんて…」  
「ちよつと予想外ね。」  
「ビックリした。」  
「俺ん家親が外国で仕事してるからさ。自分でご飯作るんだ。妹は料理出来ないしさ。」  
「へえ。」  
「井上君凄いねっ！」

ヨシッ！ちよつと好感度アップ！自炊出来て良かったあゝ

「そつだ！今度私に料理教えてよっ！」  
「俺が芹沢に？俺なんかで良いなら教えるけど…」  
「ありがとう！じゃあいつにする？」  
「俺基本ヒマだからいつでも良いぜ。」  
「じゃあ早速今週の土曜日から良いかなっ？」  
「おう。じゃあ場所は俺ん家で良いか？」

「井上君のお家？」

「いや…芹沢の家でも良いんだけど…」

「ううん。井上君のお家で良いよっ！行ってみたいし。」

「じゃあ土曜日に俺ん家ね。」

キターッ！二人で一緒に料理！初めての共同作業！共同作業…なんて良い響きなんだ！

「なら俺らも遊びに行こうぜ。」

「は？」

「それ良いね。小鳥遊さんと東雲さんも一緒にどう？」

「いや…」

「私は良いわよ。」

「だから…」

「私もヒマ。」

「ちよっ…」

「じゃあ皆でカズの行こう！」

「いや、ちよつと待…」

「「「「「おーっ！」「」「」「」

「いや、だからちよつと待てよ！人の話聞けよ！」

「なんか久しぶりだな。」

「最近行ってなかったしね。」

「どんな感じなのかしら。」

「楽しみ。」

「人の話を聞けえええええっ！！！」



屋上つてこの時期結構寒いよね！（後書き）

作者「いやあ…3ページ分書くのは初めてでキツかったよ。」

一希「今までサボつて溜まった分なんだから我慢しろよ。」

作者「何も言い返せない…」

一希「まあこれからはサボンねえようにしろよ。」

作者「へーい。」

リアルメイドって見たことある？てかメイドって本当に存在するの？（前書き）

またしても新キャラ登場！

北村は…そろそろ出そうと思う。



「リムジン」  
「Limousine!?!?!?!?!」

「そんなに驚かなくても…てかなんで英語?」

「いやだつて…」

「まあいいや。早く乗りなよ。」

俺達はハルの使用人さんに挨拶をしてリムジンに乗った。

俺達は緊張していて固まっていた。

リヨウなんて緊張のあまり気絶してやがった。ちなみにハルは固まっ  
っている俺達を見て苦笑していた。ちよつとむかつくが…俺も同じ  
立場なら爆笑してるはずだから何も言えない。

「皆さま、お着きになりましたよ。」

…は!もう着いたのか。此処に来るまでのことを全く覚えてない…  
まあいつか。

「こちらでございます。」

…デッケーツ!!何この屋敷!!何坪あんだよ!!何んで門から屋  
敷まで500メートルぐらいあるんだよ!!てかデケエよ!!

「でかつ!!」

「三次元にもこんな屋敷が存在するとは…」

「これが高嶺君のお家…」

「凄い…」

「うん…」

「皆何突っ立ってるの？置いてっちゃんよ？」

俺達はハルの言葉で我に帰ってハルの後に付いて行った。

「此処が僕の部屋だよ。」

「へー」

「そうなんだー」

「広いわねー」

「凄いねー」

「あれ？あんまり驚いてないね。」

「いやーだってねえー」

「此処に来るまでにいっぱい驚いたしね。」

「今更こんなもんじゃ驚かないよ。」

「そっか…まあいいや。それじゃあとりあえずこのジュースで乾杯しよっか。」

「そうだな。じゃあ乾杯！」

「」「」「」「」「」「」「」

うめえ！このジュース見た目は只のグループジュースなのに飲んでみると全然違う！濃厚な感じなのに後味がすっきりしてる。これが高級なジュースか…味わって飲もう。

「何かやる？」

「人生ゲームはどうかしら？」

「おっ！いいね。」

「盛り上がるしね。」

「じゃあちよつと待ってて。今楠田さんに持って来てもらうから。」

こういう時は人生ゲームが一番だよな。

楠田さんってのは楠田美嘉くすだみかさんのことだ。ちなみに楠田さんは使用人さん（メイドさん）の一人だ。

「あれ？みんな集まって何してんの？俺らも混ぜてよ。」

楠田さんを待っているとどっかで見たことある奴とそいつのメイドさんらしき人が突然部屋に入って来た。

「あれ？ユウじゃん。どうしたの？」

「ヒマだったから遊びに来ちゃった！」

「そう。僕は別に良いけど……」

「大勢の方が楽しい。」「東雲さんが良いって言うてるから良いよ。」

「ありがとうございます。これから一年間クラスメイトとしてよろしくね。」

「こちらこそよろしく。」

このいきなり入って来た奴はクラスメイトの佐波さなみゆうし夕士。佐波の親もハルの親同様有名な会社の社長だ。

詳しいことはわからないがハルとは幼なじみらしい。  
ちなみにかなりのドSだ。

「ところで佐波、そのメイドさんは？見た感じ同じくらいの年齢だよな？」

「ああこの子？この子はメグ。北村恵だよ。きたむらめくみ可愛いだろ？俺らと同じ年だ。」

「きつ北村恵です。私のことはメグで良いですよ。」  
「わかった。よろしくなメグちゃん。」

佐波の野郎何笑ってやがんだ？メグちゃんは顔を真っ赤にして俯いてるし…俺何かしたか？

「って痛っ！何すんだよシノ！」

「虫がいた。」

「嘘だろ。」

「うん。嘘。」

「いくら可愛いからってずっと見てるのは女の子に失礼だよっ！井上君！」

「じっじめん…」

芹沢に怒られた…嫌われたかな？泣いていいかな？

てかなんで俺だけ？リヨウとヒロは普通にメイドさんにナンパしてんの…

「お待たせいたしました。人生ゲームをお持ちいたしました。」

「ありがとうございます。楠田さん。じゃあやるつか。恵さんもやるよね？」

「私は…」

「もちろんやるよね？メグちゃん。」

「…わかりました。私もやります。」

メグちゃんもやりたいのなら普通にやりたいうって言えば良いのに…  
やっぱり使用人としては思う所があるのかな？

「それじゃあビリの人には罰ゲームありってことでゲームスタート

」！

「なんで最後の最後にルール付けすんだよ！！」



リアルメイドって見たことある？てかメイドって本当に存在するの？（後書き）

作者「ちよつと…二日連チャンはキツイ…」

一希「まあ…お前のわりにはよくやったよ。」

作者「一応褒め言葉として受け取っておくよ。」

一希「ハハハハハ。」

作者「…そんな態度とるんだったら次から主人公を北村にするよ？」

一希「それだけは勘弁。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6638i/>

---

俺の平凡で平凡じゃない日常

2010年10月27日10時30分発行